

コンピュータによる文体研究の試み

— D. H. ローレンスの短編へのアプローチ —

An Essay Directed at Computer-Assisted Stylistics

西 村 道 信
Michinobu NISHIMURA

1. 0. 本論文の目的

最近コンピュータを利用した文学研究が盛んとなり、大きな成果をあげてきた。文体論に関しても、多くの優れた興味ある方法論が紹介され、益々隆盛の一途を辿っている。

本稿では、誰でも使用可能なパーソナル・コンピュータを使用して、特定の作家の文体研究をするための方法と手順を、実例をあげて試みようとするものである。

2. 0. 文体研究へのアプローチ

コンピュータを利用して文体研究をする場合、従来からの手順として、現れる語をすべて統計的に処理する方法がある。即ち Stylo-Statistics と呼ばれているものである。よく問題となる使用頻度であるが、多いものだけが重要視されることも多いが、少ないということもまた同様に重要であることが往々にしてある。使用頻度のもつ本当の意味は、いかに規範から逸脱しているかということであろう。そして、その逸脱こそ作家の意図したところであれば、何らかの方法で理解しなくてはならない。

2. 1. Stylo-Statistics と規範

規範というものを設定しようとする、膨大な量の文を収集し、それぞれ品詞分類した上で、それぞれの品詞の規範的な頻度を求める。つまり、頻度辞典を作成するのである。こういった方面の研究はフランス語の方で進んでいる。規範頻度なるものをフランス語の語彙で決定したのは、Institut National de la Langue Française で、もともなったデータは7千万語よりなるコーパスである。しかしながら、これだけのデータでも未だ足りない部分が多々あると思われる。というのは、人間の言語生活をすべて網羅したとはとても言えないからである。いずれにせよ、こういった意味での規範というものは、社会言語即ちソシールの言う langue に当り、それからの逸脱は個人言語 parole に当たると言えるであろう。

2. 2. Key-word とその探求

Stylo-Statistics では parole の概念をさらに押し進めて、語彙に関して頻度を調査し、それから作品を研究している。Robert F. Allen は、次のような公式を用いて規範からの逸脱を見だし、key-word を探ろうとしている¹⁾。

X=Absolute or observed frequency (実際に出た頻度)

ANF=Adjusted norm frequency (当該テキストからの割り出し)

Z=Central limit theorem (standard deviate)

$$Z = \frac{(X-ANF)}{\sqrt{ANF}}$$

この公式のZが2.5以上になったら要注意であるとしている。

また、Allen はコンスタンの『アドルフ』とフロベールの『ボバリー夫人』とを対比し、後者には具体的な意味をもった形容詞が多いことと写実主義とを結び付け、作家がその形容詞を故意に使用したのだと結論している²⁾。

上記の例では頻度が大きいということに着目しているが、頻度の小さいもの、あるいは頻度にあまりこだわらずにkey-wordを見つけることも大切であると思える。これから述べる分析方法はこの両面を考慮して進めて行く。

3. 0. 特定作家の研究 — D. H. ローレンス

文体研究の題材となるテキストには、D. H. ローレンスの *The Lovely Lady*³⁾ を使用した。

その理由として、第一に、短編であるのでデータを処理する絶対量が少なく済むので扱い易い。

第二に、実はこちらの方が重要なのであるが、筆者の考えている方法が、比較的はっきりとした形で表せると思えるからである。

3. 1. 作品のあらすじ

あらすじは以下の通りである。

登場人物はポーリン、ロバート、シシリアの3人が中心となっており、ポーリンは72才になるが、時として30才ぐらいに間違えられるほどの美しい魅力をもった女性で、ロバートはその息子、シシリアとロバートとはいとこ同志という設定である。息子であるロバートは、母ポーリンの及ぼす絶大な力のもとで苦しみ、決してそれから逃れられないでいる。シシリアもポーリンの前では無力になってしまう。だが、ロバートが母以外の女性、ここではシシリアに思いを寄せ、精神的にしっかりと絆ができて初めて母親であるポーリンの力から抜け出すことができることになる。

コンピュータによる文体研究の試み

このようなモチーフはローレンスらしいところで、『息子と恋人』でも本質的に似かよっている。ただ違うところは、『息子と恋人』の場合には、母と息子とが互いに愛し合っており、恋人同志のように振舞っているが、この短編小説における息子のロバートは、母からあらゆる力を奪われて、無力になってしまっているという点である。

3. 2. 着目点と Key-word 探求準備

この作品を理解する上で最も重要なところは、72才になるポーリンの幻想的とも言える美しさの源泉とその衰退にあると言えるであろう。ポーリンのこの美しさは、単に魅力というよりもむしろ魔力というべきものである。そして、この絶大なる魔力の前にあっては、ロバートもシシリアも怯んでしまい、何もできないのである。だが最終的には、『息子と恋人』同様、母の死により自立心を得ることになる。

さて、母ポーリンの魔力が一体どのようなものなのか、その本質と力の盛衰をローレンスの文体的特徴を踏まえて考察してみることにする。

4. 0. コンピュータ使用とその手順

コンピュータを使用するといっても、筆者の場合は、最初にあるテキストを読み、文体的に何らかの興味をそそられた作品を選んでいるので、コンピュータに入力する前に既にある方向に気持ちが向いていることが多い。その気持ちの向き方によって、アプローチが異なることもあるが、大抵次に述べる手順によっている。

4. 1. 手順の一例

- 1) テキストをすべてコンピュータに入力する。
- 2) 入力したテキストから全単語をアルファベット順、及び頻度順に並べたファイルを作成する。
- 3) 全ての語（句）を様々な角度から検索できるようなプログラムを考える。
- 4) 精読を繰り返し、何が relevant な要素となるかを見いだす。（必要であれば、ファイルのデータにマーキングする）
- 5) 読書中あるいは読後に感じたイメージと上記の要素とを重ねて考え合わせる。
- 6) コンピュータを使用し、あるイメージにそって語彙を調べる。
- 7) 重要語句の出てくるパッセージを読み返す。
- 8) 感じたイメージとその該当箇所が一致することを確認する。
- 9) もう一度最初から読みながら、さらに relevant な要素を見いだし、4) から再び同じ作業を繰り返す。

4. 2. 使用したプログラム

上記の手順を達成するために次のプログラムを作成した。⁴⁾

1) K W I C 出力プログラム

a) Key-word の次の語をアルファベット順にソートし、各行を出力するもの。

(SAMPLE 1,3 参照)

b) コロケーションを調べるため key-word の前の語をアルファベット順にソートするものも場合により使用する。(SAMPLE 2 参照)

2) Key-word の前に付く文字列検索プログラム (SAMPLE 5 参照)

Key-word の前にどんな文字が付くかを調べる。(接頭辞、合成語など)

3) Key-word の後に付く文字列検索プログラム (SAMPLE 6 参照)

Key-word の後にどんな文字が付くかを調べる。(接尾辞、合成語など)

4) K W O C 出力プログラム (SAMPLE 4 参照)

Key-word を含む行を中心に前後数行を出力する。なお、key-word は画面ではカラリングを施し、一目で分かるようにする。

5) 全ての語のアルファベット順ソーティング、出現回数、ページを示すプログラム及び頻度のランキングを示すプログラム (SAMPLE 7,8 参照)

6) プリントアウト用フォーマットプログラム

なお、2) と 3) は詩の場合は rhyme と alliteration を調べるのにも有用である。

4. 3. 着目すべき事項 — 語彙、シンタクス、語法など

1) 仮定法及び法助動詞

2) 受動態の使用

3) fascinate の意味

4) 現在形と完了形との対比

以上のうちで特に重要で key-word であると思えるものは fascinate である。この語を中心にして物語が展開し、一つのイメージを形成する根元となっている。他の事項はそれを周囲から補足説明する形で使用されているように思われる。

4. 4. イメージと語彙

あるテキストを読んで、何らかのイメージがすぐに描かれるような、ある程度明示的なイメージの形成が行える場合は、そのイメージにそって語彙を調べて行くことになるが、そうでない場合には、ある手順を踏むことになる。

The Lovely Lady の場合、隠されたイメージによって全体が支配されていると言ってよい。

そのイメージの根元となるのが fascinate という語である。この語の本来の意味を深く読み取ることから始めねばならない。

4. 5. イメージの成立過程

何度もこのテキストを精読していると、どうも fascinate という語に何か特別な意味があるように思えてくる。通常、fascinated と受動形式で使用されることが多いが、ただ単に「うっとりさせられる」とか「魅了される」とかいった意味よりも、もっと本来的な強烈な意味で使用されているようである。「あらゆる力を奪われて」とか「無能力にされて」といった方が適切であろう。

このfascinateをO E Dで調べてみると、以下の例が載っている。

The serpent fascinates its prey, apparently by the power of his eyes.

この例から大切な要素が3つ考えられる。「へび」、「目」、「力」の3つである。

また、The Random House Dictionary には次の例がある。

The sight of the snake fascinated the rabbit.

研究社の新英和大辞典（第5版）では次の例となっている。

The snake fascinates its victim.

フランス語の辞書 Larousse にも同様の例が見られる。

Serpent qui fascine sa proie. (Serpent that fascinates its prey.)

やはり、他の例からも「へび」との関連性は確認できた。それでは、このテキストのなかでは、どのようにしてそれが確証されるのであろうか。それに関しては次の2例を見ることにしよう（検索上、1000文字で1ページとしている）。

Ah! Ciss was not blind to the eyes which he fixed on his mother, eyes fascinated yet humiliated, full of shame. (p.11)

テキストの例からも key となる「目」が共起していることに注意したい。

And lately she had been thinking that Pauline was going to kill Robert as she had killed Henry. It was clear murder: a mother murdering her sensitive sons, who were fascinated by her: the *Circe*! (p.18)

ここではポーリンがキルケに例えられている。キルケはギリシャ神話にでてくる魔女で、スキュラという乙女を「へび」に変えてしまったのである。ここまでくると、もう「へび」のイメージが確かなものとなり、fascinate - Circe - serpent (snake)という図式が成り立つ。あとは、できるだけこの図式に關与的であると思える語彙を見つけ出す努力をするのである。それには、先ほどファイルにしてあるA-Zまでの全ての語をアルファベット順にしたものから順次選び出す。そして、それが確かに「へび」のイメージに当てはまるかをKWIC出力、KWOC出力で確かめる。さらに、他のプログラムを使用して關与的であると思える語

をできる限り検索する。それから、テキストを精読してそのイメージや語彙等が間違いのないものであることを確認する。また、Circe が出たことにも関連して、ギリシャ・ローマ神話との係わり合いをも考察する必要がある。

4. 6. 言語学的文体論への応用

上述の方法は、philological circle「心理的循環」⁵⁾と言われるものを応用したものであるが、本来の立案者はレオ・シュピッツァーである。筆者はこの方法をなんとかコンピュータを利用して効率よく行いたいと考えている。というのは、その方法論があくまでも言語的事実を土台とした、言語学的文体論に応用できると考えており、美学的文体論と言われるものをもある程度明示的に論じたいからに他ならないからである。シュピッツァーはテキストを読んでいて、何か心に「カチッと感じられるもの」を inner click⁶⁾と呼んでいる。これを中心にして物語が構成されているのである。筆者は *The Lovely Lady* に関しては、fascinate と Circe が inner click であると感じられたのである。

5. 0. イメージと語句

「へび」のイメージを心に描きながら、それに関与的であると思える語句を A-Z のファイルから全て抜き出し、それをいくつかのグループにまとめる作業が必要となる。

複数のグループにまたがってくる語句は、最も関連性が深いと考えられるグループにのみ登録することにした ([]内の数字は出現回数)。

5. 1. 「へび」と直接的又は明示的に結び付く語句

アルファベット順リスト

arched	[1]	limbs	[2]	strings	[1]
arches	[1]	long	[3]	swerve	[1]
arms	[2]	parapet	[1]	tail	[1]
balustraded	[1]	parasol	[1]	tailed	[1]
body	[5]	pipe	[1]	texture	[1]
bottle	[1]	rain-pipe	[4]	throat	[1]
candle	[1]	row	[1]	tube	[2]
candles	[1]	speaking-tube	[1]	twisted	[1]
chaise-longue	[1]	straw	[1]	wire	[2]
chimneys	[1]	stream	[2]	writhed	[2]
gutter	[1]	stretched	[1]		
ladder	[1]	stretching	[1]		

コンピュータによる文体研究の試み

出現回数が2回以上の語句リスト

body	[5]	arms	[2]	tube	[2]
rain-pipe	[4]	limbs	[2]	wire	[2]
long	[3]	stream	[2]	writhed	[2]

5. 2. 「へび」と間接的又は暗示的に結び付く語句

アルファベット順リスト

agency	[1]	curved	[1]	prostrate	[1]
appear	[1]	eagle	[1]	puzzled	[1]
appeared	[1]	eyebrows	[1]	qualms	[1]
attention	[1]	eyelids	[1]	rappings	[1]
attentively	[1]	eyes	[15]	reverie	[1]
attractive	[1]	eye-wrinkles	[1]	roused	[1]
blind	[1]	flesh	[2]	rustle	[1]
bridge	[2]	force	[1]	rusty	[1]
bridged	[1]	forced	[1]	seducing	[1]
brocade	[1]	hole	[5]	silence	[10]
brushing	[1]	impossible	[1]	speechless	[2]
Cecilia	[41]	impressed	[2]	squirming	[1]
Cecilia's	[1]	inert	[4]	stunned	[2]
Ciss	[47]	insidious	[1]	unspeakable	[3]
Ciss's	[1]	insufferable	[1]	unspoken	[2]
climb	[1]	intruding	[1]	vent	[1]
climbed	[1]	mouth	[4]	voluptuously	[1]
creep	[1]	narrow	[1]	will-power	[1]
creeper	[1]	paralysed	[1]	witch	[2]
creepy	[1]	power	[3]		
curve	[1]	powerless	[1]		

出現回数が2回以上の語句リスト

Ciss	[47]	mouth	[4]	speechless	[2]
Cecilia	[41]	power	[3]	stunned	[2]
eyes	[15]	unspeakable	[3]	unspoken	[2]
silence	[10]	bridge	[2]	witch	[2]

大手前女子学園「研究集録」(大手前女子短大研集) 第11号 (1991年)

hole	[5]	flesh	[2]
inert	[4]	impressed	[2]

5. 3. ギリシャ・ローマなどに関する語句

アルファベット順リスト

Bacchante	[1]	consul	[1]	Mona Lisa	[1]
barbaric	[1]	Etruscan	[1]	Naples	[1]
caryatid	[1]	Italian	[5]	Venetian	[1]
Circe	[1]	Leonardo	[1]		

出現回数が2回以上の語句リスト

Italian	[5]
---------	------

なお、イタリア語が数行使用されているが、ここに含まれる。

5. 4. 魔力、神秘、邪悪、悪魔的支配の感じられる語句

アルファベット順リスト

absorbs	[1]	malice	[2]	strange	[3]
armour	[1]	malicious	[1]	strangely	[1]
beautiful	[5]	mask	[2]	supernatural	[2]
beautifully	[2]	mysterious	[3]	transference	[2]
beauty	[1]	mysteriousness	[1]	uncannily	[1]
brilliancy	[1]	odd	[1]	uncanny	[2]
brilliant	[1]	ominous	[1]	unnatural	[2]
devil	[2]	secrecy	[1]	venomously	[1]
diabolic	[1]	secret	[3]	ventriloquism	[3]
evil	[1]	secrets	[1]	vices	[1]
exotic	[1]	secret-troubled	[1]	voice	[25]
exquisite	[3]	skeleton	[1]	voices	[1]
fiend's	[1]	skull	[2]	whisper	[5]
ghosts	[1]	sound	[4]	whispered	[1]
glamour	[1]	sounds	[3]	whispering	[1]
malevolence	[1]	spite	[1]	womb	[1]

出現回数が2回以上の語句リスト

voice	[25]	sounds	[3]	skull	[2]
beautiful	[5]	strange	[3]	supernatural	[2]

コンピュータによる文体研究の試み

whisper	[5]	ventriloquism	[3]	transference	[2]
sound	[4]	beautifully	[2]	uncannily	[2]
exquisite	[3]	devil	[2]	uncanny	[2]
mysterious	[3]	malice	[2]	unnatural	[2]
secret	[3]	mask	[2]		

5. 5. 無力、絶望、恐怖、不安、驚き、悲しみなどに関する語句

アルファベット順リスト

afraid	[3]	died	[6]	murdering	[1]
aghast	[1]	disabled	[1]	mute	[1]
agonised	[1]	disconsolate	[1]	overshadowed	[1]
agonisingly	[1]	dread	[2]	painful	[1]
alert	[2]	dreadful	[2]	pathetically	[1]
anguished	[1]	dull	[1]	pent-up	[1]
anxiously	[1]	dusky	[1]	perplexity	[1]
ashamed	[1]	fear	[1]	persistence	[1]
astonished	[2]	fearfully	[1]	poignacy	[1]
astounded	[1]	feeble	[1]	poignant	[1]
atrocious	[1]	fierce	[1]	poison	[1]
awful	[11]	frail	[1]	poisonous	[1]
bitter	[2]	frenzy	[1]	shadows	[1]
bitterly	[2]	frightened	[1]	shrivelling	[1]
bitterness	[1]	frustration	[1]	suffered	[1]
bleed	[2]	ghastly	[2]	surprise	[1]
bodiless	[2]	grief	[2]	terrible	[2]
bother	[1]	grisly	[1]	terrified	[2]
candle-light	[1]	haggard	[4]	terror	[2]
chagrin	[1]	haggardness	[1]	thrill	[1]
clumsiness	[1]	helpless	[2]	thrilled	[1]
clumsy	[1]	hesitated	[1]	thumps	[1]
confused	[3]	horrible	[2]	tremble	[1]
confusion	[2]	horror	[2]	trouble	[1]
consternation	[1]	humiliated	[1]	troubled	[1]
convulsed	[1]	hysteria	[1]	weak	[3]

大手前女子学園「研究集録」(大手前女子短大研集) 第11号 (1991年)

crazy	[3]	impassive	[1]	weakened	[1]
crumpled	[3]	irritability	[3]	weakly	[1]
dark-complexioned	[1]	kill	[4]	weakening	[1]
darkened	[1]	killed	[4]	weary	[1]
darkness	[1]	killing	[1]	weird	[4]
dead	[8]	misfortune	[1]	weirdly	[1]
death	[1]	misgiving	[1]	wither	[1]
despair	[1]	mortification	[1]	woebegone	[1]
die	[1]	murder	[3]		

出現回数が2回以上の語句リスト

awful	[11]	irritability	[3]	dreadful	[2]
dead	[8]	murder	[3]	ghastly	[2]
died	[6]	weak	[3]	grief	[2]
haggard	[4]	alert	[2]	helpless	[2]
kill	[4]	astonished	[2]	horrible	[2]
killed	[4]	bitter	[2]	horror	[2]
weird	[4]	bitterly	[2]	terrible	[2]
afraid	[3]	bleed	[2]	terrified	[2]
confused	[3]	bodiless	[2]	terror	[2]
crazy	[3]	confusion	[2]		
crumpled	[3]	dread	[2]		

6. 0. 再読とイメージの再確認

ここまで準備が整えば、上述したごとく、再読をしてイメージの確認をするという心理的循環を行う。そして、既に4.3で指摘した事項に関する例をも考慮に入れて読み進む。

6. 1. イメージと着目事項

法助動詞のうちから一例あげてみよう。

At seventy-two, Pauline Attenborough *could* still sometimes be mistaken, in the half-light, for thirty. (p.1)

ここは、ポーリンの魅惑的な美しさを述べているところである。さらに、*must* の例では、Cecilia's own confusion dated from only five years back — Robert's *must* have started before he was born. In the lovely lady's womb he *must* have felt very confused. (p.8)

これもポーリンの魔力を示しているところである。受動態の例も見てみると、

She (Cecilia) *was impressed*, somewhere, all the time. (p.7)

And yet, oh, horror! — she (Cecilia) was going to *be forced* to believe in the supernatural! And she loathed the supernatural, ghosts and voices and tappings and all the rest. (p.16)

この2例は、共に行為者を出しておらず、それゆえ被動作主のみにスポットを当て、情容赦なく服従させられたり、見えざる恐怖におびえたりする様子が描かれている。

ところで、時制の面から考えた場合、ポーリンの魔力が永遠のものであることを表そうとすれば、現在形が最も適しているであろう。これに反し、その魔力が既にもう失われてしまったならば、完了形式での描写が適切であると思える。

Mrs. Attenborough's face was of the perfect oval, and slightly flat type that wears best. There *is* no flesh to sag. Her nose rode serenely, in its finely bridged curve. (p.1)

She (Cecilia) realised vaguely that her aunt, once a definite thrust of condemnation *had penetrated* her beautiful armour, *had just collapsed* squirming inside her shell. (p.37)

6. 2. 「へび」とオノマトピア

テキストを何度も読み返してみると、至るところに「へび」のイメージが隠されているのが感じ取られる。ローレンスは「へび」という語を使用せず、それを暗示する語句によって全体的にぼんやりとしたイメージを読者に形成させたのである。さらに、音の面、つまり onomatopoeia の面からの考察も必要なのである。いくつかテキストに見受けられるが、何よりも印象的なのは、登場人物の一人 Cecilia という名である。この名には [s] が2つも入っている。この音は「へび」が動いて行くときに出す音を連想させるに違いない。さらにまた、彼女は Ciss とも呼ばれるが、この [sis] という音の印象はまさに「へび」そのものである。これは、単なる偶然ではなく内容にぴったりの名を作家は選んでいるのである。登場人物の名が文体論的に重要となっている作品は、バルザックの『サラジヌ』があり、ロラン・バルトの綿密な分析でよく知られているが⁷⁾、ローレンスも人物名にイメージを解くカギを与えたのであろう。Cecilia という名で42回、Cissで48回、合計90回出現しているのである。おそらく読者の頭の中で [s] という音が何度も響き、無意識の内に「へび」のイメージが形成されることを作家は意図していたのかも知れない。そして、先述のキルケは英語の発音では [s] がやはり2回現れる。これも偶然とは思えないのである。

シシリアがポーリンの魔力に打ち勝つきっかけとなったところにも、「へび」のイメージが浮かんでくる。

シシリアがある日、平たい屋根の上で日向ぼっこをしていると、突然、奇妙な声が聞こえてくる。シシリアは最初それに恐ろしさを感じるが、よく調べるとそれはポーリンの声だと判明する。ポーリンの独り言を呟く声が、丁度通話管のように雨どいを伝って聞こえてきた

ものであった。ローレンスがわざわざこんな方法を用いたのは、屋根伝いに這う雨どいを「へび」に見立てようとしたからだと考えられる。

7. 0. 結 語

「へび」のイメージに関しては、直接的にも間接的にもイメージを描くには十分な語彙が揃っていることが実証されたが、果してローレンスは物語の構成にどのように関連させようとしたのであろうか。それに関しては、ギリシャ神話がモチーフとして使用されていることを考慮しなくてはならない。

作品全体を通じて密接に係わってくる問題は、fascinate という語をギリシャ神話とうまく絡ませて物語を構成していることである。この物語の主導モチーフは、ロバートが母ポーリンからいかに自立してゆくか、いかに母の魔力にうち勝てるかというものであるが、ギリシャ神話が副次モチーフとして巧みに使用されている。ポーリンをキルケに見立てて、キルケの持つ魔力をポーリンに授けた。ポーリンはその魔力でロバートとシシリアからあらゆる力を奪い取っている。ローレンスは既に述べたスキュラをシシリアと同一視していると思える。キルケとスキュラにたとえたのである。キルケによってへびの化物となったスキュラには、実はかつての乙女であった頃からグラウコスという恋慕される相手があった。グラウコスは元来人間であったが、今は海の怪物となっている。グラウコスはスキュラを恋しているが、スキュラの方はその気がない。彼は思い悩んでキルケのところに相談に出かけるが、キルケはそんな話は聞きたくない。なぜならキルケはグラウコスを愛しているからであった。そのグラウコスから話を聞かされたキルケは腹立ちまぎれにグラウコスとスキュラを海の底に沈めてしまう。だが、千年経った後にはこの2人が蘇生することになるのである。

神話の中に出てくる3人、キルケ、スキュラ、グラウコスをそれぞれポーリン、シシリア、ロバートに置き換えてみると、作者の考えた図式に当てはまるであろう。

シシリアは雨どいのおかげでポーリンの弱点を見破り、あの魔力に打ち勝った。ポーリンはそれ以後病の床につくはめとなり、果てはペロナール（鎮静剤）の飲み過ぎで死んでしまう。自分の秘密を知られてしまい、生きる気力をなくした末の自殺であるとも考えられる。ポーリンの死によって、シシリアとロバートが初めて自立できることになる。ポーリンの魔力の根元は何であったか。それはポーリンの絶対的支配力からくるものである。ポーリンは本当に人を愛したことがなく、単に支配力、人を食べ物にして生きてゆく力を愛したにすぎない。

“Do you think your mother ever loved anybody?”

Ciss asked him tentatively, rather wistfully, one evening.

He looked at her fixedly.

“Herself!” he said at last.

コンピュータによる文体研究の試み

"She didn't even love herself," said Ciss. "It was something else — what was it?" She lifted a troubled, utterly puzzled face to him.

"Power!" he said curtly.

"But what power?" she asked. "I don't understand."

"Power to feed on other lives," he said bitterly. "She was beautiful, and she fed on life. She has fed on me as she fed on Henry. She put a sucker into one's soul and sucked up one's essential life." (p.38)

獲物を見すえる「へび」のように、ポーリンが見つめると回りにいる者はただ彼女がいるというだけで、あらゆる力を奪われて抵抗できない。ポーリンはこういった無抵抗の者たちの生命を吸い取ってこれまで生きてきていたのだった。だが、ロバートとシシリアの情熱と自立心がキルケたるポーリンの魔力に打ち勝った。千年もの長い間苦しめられたグラウコスとスキュラが、もう一度若々しく美しい人となって蘇生するというあのギリシャ神話のモチーフを、作者ローレンスがこの物語を「へび」のイメージを暗示するという形で、今一度新たに蘇らようとしたのである。

付記

本稿は、1988年11月に開催された日本英語学会のシンポジウム「コンピュータ・コンコーダンスで何ができるか」(司会：水鳥喜喬教授)で発表した原稿をもとに、加筆、削除をしたものである。

注

1. R.F.Allen: "The Stylo-Statistical Method of Literary Analysis", *Computers and Humanities*, vol.22, 1988, pp.2ff.
2. *ibid.*
3. 底本は Heinemann の Phoenix 版 *The Complete Short Stories* VOL.Ⅲを用いた。底本データページ数：18 (pp.761-778) 総語数：6919 語種類：1659
4. プログラムはアセンブリ言語で組んだ。なお、サンプルのKWIC等はページ数を表示せず、できる限り長いコンテキストを一行から取るようにした。そのため、ここにあげたプログラムは、必要に応じて同一画面上で、ファンクション・キーによりすべてを切り替え可能とし、KWOC(7、11行選択)や当該キー・ワードを含む1ページ等も、ページ数と共にすぐ表示できるようになっている。
5. L.Spitzer: *Linguistics and Literary History*, New York, 1962.
6. *ibid.*
7. R.Barthes: *S/Z*, 1970, Paris.

大手前女子学園「研究集録」(大手前女子短大研集) 第11号 (1991年)

SAMPLE 1 KEYWORD='fascinated'

was fascinated by her. Completely fascinated. And for the rest, paralysed in a he did not love his mother. He was fascinated by her. Completely fascinated. And ering her sensitive sons, who were fascinated by her: the Circe! /"I suppose I m which he fixed on his mother, eyes fascinated yet humiliated, full of shame. He
sum= 4

SAMPLE 2 KEYWORD='fascinated'

was fascinated by her. Completely fascinated. And for the rest, paralysed in a which he fixed on his mother, eyes fascinated yet humiliated, full of shame. He he did not love his mother. He was fascinated by her. Completely fascinated. And ering her sensitive sons, who were fascinated by her: the Circe! /"I suppose I m
sum= 4

SAMPLE 3 KEYWORD='could'

gone on collecting, buying where she could, and selling to collectors and to mus f the stable buildings, to which she could climb from a loft at the end, started e dark outside, sometimes wished she could creep up to him and say: "Oh, Robert! erlasting youth; that is to say, she could don her youth again like an eagle. Bu line's was Pauline's, and though she could give almost lavishly, still, one was y dear. I only warned you. What else could I do? And you lost your spirit and di iss listened with all her might. She could just detect the faintest, faintest mu ook like a Leonardo woman who really could laugh outright. /Her niece Cecilia wa , so she needn't be smug at all, she could laugh that lovely mocking Bacchante l it wasn't my fault, dear. And Robert could marry our poor dull Ciss to-morrow, i lovely and changeless self, that age could not wither, nor custom stale: so brig oise. Ciss listened intently. No, it could not be ventriloquism. It was worse, s sun, listening intently to words she could not follow. Softly, whisperingly, wit evil, reeking with malevolence. She could not bear to see either her son or her was so utterly uncanny. Poor Cecilia could only lie there unclothed, and so all ical passionateness. And how Pauline could play on this! Ah, Ciss was not blind At seventy-two, Pauline Attenborough could still sometimes be mistaken, in the h crets. Her lunch was very light, she could take her sun-and-air-bath before noon
sum= 18

SAMPLE 4 KEYWORD='Circe'

him before he ever regained consciousness. Ciss knew the few facts from her own father. And lately she had been thinking that Pauline was going to kill Robert as she had killed Henry. It was clear murder: a mother murdering her sensitive s ons, who were fascinated by her: the Circe! /"I suppose I may as well get up," m urmured the dim, unbreaking voice. "Too much sun is as bad as too little. Enough sun, enough love thrill, enough proper food, and not too much of any of them, a nd a woman might live for ever. I verily believe for ever. If she absorbs as muc
sum= 1

コンピュータによる文体研究の試み

SAMPLE 5 KEYWORD='pipe' and 'tube'

Good God! Out of the hole of the rain-pipe! The rain-pipe was acting as a speaking-tube! Impossible! The rain-pipe was acting as a speaking-tube! Impossible! She opened to look at the mouth of the rain-pipe. There it was, in the corner, under a not to be heard. No sound came up the pipe. She must be lying with her face away her pent-up rage going down that rain-pipe. At the same time, she almost laughed

sum= 5
he rain-pipe was acting as a speaking-tube! Impossible! No, quite possible. she a suddenly bent her mouth down to the tube, and said in a deep voice: /"Leave Robert as you killed me, she said with slow enunciation, and a deep but small voice looked at him attentively, with her slow-thinking hazel eyes. Under his impatient man would put on a thick coat and walk slowly to the little balustraded bridge outside, sometimes wished she could creep up to him and say: "Oh, Robert! It's

SAMPLE 6 KEYWORD='creep' and 'slow'

sum= 3
ngs and all the rest. /But that awful creepy bodiless voice, with its rusty sort ojecting from the thick leaves of the creeper on the wall. If Pauline, lying the k outside, sometimes wished she could creep up to him and say: "Oh, Robert! It's

sum= 4
obert as you killed me," she said with slow enunciation, and a deep but small vo ss looked at him attentively, with her slow-thinking hazel eyes. Under his impas man would put on a thick coat and walk slowly to the little balustraded bridge o /"How unfortunate all round," he said slowly. "Unfortunate for you? You are luc

SAMPLE 7 SORTING IN ALPHABETICAL ORDER

[A]		24, 24, 24, 24,	accusations	[1]
		24, 25, 26, 26,	: 6	
		26, 27, 28, 28,	accused	[1]
		28, 28, 28, 29,	: 17	
		30, 30, 30, 30,	accusing	[1]
		30, 30, 30, 30,	: 32	
		30, 31, 31, 31,	ached	[1]
		31, 31, 31, 32,	: 1	
		32, 32, 32, 33,	acidly	[1]
		33, 33, 33, 33,	: 36	
		34, 34, 34, 34,	across	[3]
		34, 34, 34, 35,	: 6, 9, 14	
		35, 35, 35, 35,	acting	[1]
		35, 35, 36, 36,	: 19	
		36, 36, 36, 36,	actress	[1]
		36, 37, 37, 38,	: 17	
		38, 38, 39	acutely	[1]
		A [3]	: 33	
		: 16, 19, 29	added	[1]
		about [12]	: 28	
		: 4, 5, 7, 8,	admired	[2]
		11, 12, 16, 16,	: 21, 24	
		20, 25, 28, 35	adventure	[1]
		above [1]	: 13	
		: 4	affair	[1]
		absent-minded [1]	: 24	
		: 19	afraid	[3]
		absorbs [1]	: 24, 25, 35	
		: 18	African	[1]
		accusation [1]	: 21	
		: 6	:	
			:	

大手前女子学園「研究集録」(大手前女子短大研集) 第11号 (1991年)

SAMPLE 8 FREQUENCY RANKING LIST

the	[318]	herself	[17]	still	[9]
and	[236]	if	[17]	though	[9]
she	[204]	is	[17]	years	[9]
was	[186]	looked	[17]	yes	[9]
a	[178]	lovely	[17]	are	[8]
her	[173]	more	[17]	dead	[8]
of	[152]	some	[17]	ever	[8]
in	[132]	went	[17]	going	[8]
to	[132]	which	[17]	lady	[8]
he	[105]	woman	[17]	my	[8]
it	[82]	face	[16]	over	[8]
that	[67]	me	[16]	saw	[8]
you	[65]	never	[16]	true	[8]
had	[64]	eyes	[15]	under	[8]
with	[55]	from	[15]	where	[8]
at	[49]	Henry	[15]	young	[8]
Robert	[49]	into	[15]	afternoon	[7]
but	[47]	suddenly	[15]	am	[7]
Ciss	[47]	sun	[15]	deep	[7]
as	[46]	two	[15]	drawing-room	[7]
his	[46]	who	[15]	go	[7]
Pauline	[45]	yet	[15]	good	[7]
said	[45]	again	[14]	heard	[7]
not	[44]	by	[14]	its	[7]
I	[43]	much	[14]	know	[7]
so	[42]	or	[14]	look	[7]
Cecilia	[41]	too	[14]	loved	[7]
on	[40]	poor	[13]	made	[7]
for	[36]	about	[12]	roof	[7]
very	[33]	almost	[12]	rose	[7]
all	[31]	do	[12]	sat	[7]
like	[29]	down	[12]	soft	[7]
aunt	[27]	oh	[12]	something	[7]
little	[25]	Pauline's	[12]	this	[7]
there	[25]	than	[12]	time	[7]
voice	[25]	they	[12]	ah	[6]
an	[24]	awful	[11]	another	[6]
did	[24]	knew	[11]	before	[6]
him	[24]	lay	[11]	dear	[6]
be	[23]	love	[11]	died	[6]
no	[23]	man	[11]	door	[6]
when	[23]	sometimes	[11]	evening	[6]
mother	[22]	well	[11]	garden	[6]
old	[22]	after	[10]	gave	[6]
up	[22]	always	[10]	get	[6]
one	[21]	don't	[10]	hair	[6]
only	[21]	heart	[10]	I'm	[6]
then	[21]	must	[10]	life	[6]
would	[21]	quite	[10]	marry	[6]
have	[20]	silence	[10]	night	[6]
even	[19]	why	[10]	really	[6]
out	[19]	away	[9]	should	[6]
were	[19]	been	[9]	softly	[6]
what	[19]	just	[9]	sort	[6]
could	[18]	last	[9]	started	[6]
how	[18]	own	[9]		
rather	[18]	room	[9]		
came	[17]	son	[9]		

コンピュータによる文体研究の試み

参考文献

- E. Ager (ed.): *Advances in Computer-aided Literary and Linguistic Research*, Birmingham, 1979.
- A. Aitken et al.: *The Computer and Literary Studies*, Edinburgh, 1973.
- R. Allen: *A Stylo-Statistical Study of 'Adolf'*, Paris, 1984.
- W. Andrew (ed.): *Critics on D.H.Lawrence*, Florida, 1971.
- A. Bell (ed.): *Selected Literary Criticism*, London, 1956.
- C. Butler: *Computers in Linguistics*, Oxford, 1985.
- B. Dolphin: *Vocabulaire et Lexique*, Genève, 1979.
- C. Dolphin: *Méthodes de la Statistique Linguistique et Vocabulaire Fantastique de Malpertuis*, Genève, 1979.
- D. Dugast: *La Statistique Lexicale*, Genève, 1980.
- R. Fowler: *Essays on Style and Language*, London, 1966.
- P. Guiraud: *Les Caractères Statistique du Vocabulaire*, Paris, 1954.
- M. Hockey: *A Guide to Computer Applications in the Humanities*, London, 1980.
- A. Jones et al.: *The Computer in Literary and Linguistic Studies*, Cardiff, 1976.
- A. Kenny: *The Computation of Style*, Oxford, 1982.
- C. Maciel: *Etudes Statistique du Vocabulaire de Six Essais de Paul Valéry*, Genève, 1984.
- R. Oakman: *Computer Methods for Literary Research*, Columbia, 1980.
- M. Spika (ed.): *D.H.Lawrence*, New York, 1963.
- L. Spitzer: *Linguistics and Literary History*, New York, 1962.
- L. Spitzer: *Etudes de Style*, Paris, 1970.
- R. Wisby (ed.): *The Computer in Literary and Linguistic Research*, Cambridge and London, 1971.
- 柴田多賀治 『ロレンス文学の世界』 八潮出版社、1974.
- 西村孝次 『ロレンスの世界』 中央公論社、1970.